

令和6年度 第2回 くるめ支え合うプラン推進協議会 議事要旨

開催要領

- 1 日 時 令和6年11月6日（水） 14時00分～16時00分
- 2 会 場 久留米市総合福祉センター 2階大会議室
- 3 出席者 委員17名
江頭委員、川崎委員、藤木委員、縄崎委員、高田委員、橋本委員、北岡委員、津野委員、藤野委員、村井委員、尾花委員、森山委員、濱崎委員、宮原委員、刈茅委員、江上委員、佐藤(寿)委員
- 4 欠席者 委員8名
佐藤(美)委員、喜田委員、堤委員、藤田委員、矢野委員、牛島委員、永野委員、岩崎委員
- 5 傍聴者 なし

次第及び議事要旨

- 1 開会
・委員交代及び紹介（久留米市人権啓発推進協議会 藤木委員）
- 2 報告事項
(1) 令和6年度 第1回 協議会 議事要旨
※資料配布のみ
- 3 協議事項
(1) 次期プラン策定の方向性について
【主な質疑応答・意見等】
委 員：資料 10 ページ。くるめ支え合うプランの各計画等との関係図の中に、「男女共同参画行動計画」の表記がない。地域の困り事として、「女性の役員がいない」「女性の参画率が低い」こと。それらを見ることができるのは、「男女共同参画行動計画」であり、ぜひ記載してほしい。
事務局：本資料では、現プランの内容を抜粋して記載している。次期プラン策定時には反映させていきたいと考えている。
委 員：再犯防止推進計画も一緒に見直しをしていくのか。
事務局：現プランの分冊に位置付けているため、あわせて見直しを行う。
会 長：資料 13 ページ。「進捗状況を評価しやすい成果指標を設定」とあるが、

12 ページのどの部分を見直していくイメージか。

事務局：現時点ではっきりとした想定があるわけではないが、評価が難しいという意見をいただいていたのは、指標3の「生活自立支援センターの新規相談受付件数」。基準値と目標値を同じに設定している。コロナ禍においては、相談件数が約2倍になり、生活困窮者が増えたという見方もできるし、適切に窓口として対応できたという見方もでき、成果を図る意味では判断が難しい。成果指標については、新総合計画との整合も図りつつ、設定していけたらと考えている。

委員：13 ページ。「住民同士で、暮らしの中での人と人とのつながりを生み出すことを支援するコミュニケーションツール」とあるが、一般的な計画の考え方においては、今までの計画の検証、状況や課題を踏まえて、めざす姿を掲げ、施策として取り組んでいくと思う。今回は、コミュニケーションツールを作るという方向性となっているが、現時点でのイメージを共有化していただきたい。

事務局：当初は、アクションブックをイメージしており、例えば、福岡市では、地域共生社会の実現に向けた事例集を作成、地域の支え合いの取組みを住民の皆さんに広く知ってもらう工夫がされている。また、埼玉県草加市では、「ふくフクブック」という福祉プラスまちづくりのコンセプトブックを作成されている。障害分野の担当課が作成したもので、障害の有無にかかわらず、人と人との関わりが生まれる背景にある考え方や具体的な活動、イベントなどの様子をまとめた冊子になっている。もう一つ、形式が違うものとして、兵庫県尼崎市では、「アマガサキトゥーザフューチャー」というカードゲームを作成されている。「まちの身近な課題を地域の一員として自分がどうするのか」をゲーム感覚で、子供から大人まで学べるカードゲーム。公民館や学校等でも実施されているようで、広がり期待できるものとなっている。このような他市町村の取組みも参考にしながら、久留米版のものを作成できたらと考えている。

(2) 意見聴取の進め方

【主な質疑応答・意見等】

副会長：フードバンクなど、実際に困っている方の支援をしている方の意見を聞いてみてはどうか。また、市内には色々な団体がある。青年会議所やライオンズ、ロータリークラブなど奉仕活動や社会貢献を行っている団体がある。そこにも聞いてみてはどうか。意見を言うだけでなく、

実行をする団体でもあるかと思う。

事務局：ご提案いただいた団体等についても検討していきたい。

委員：男女平等を進めるための市民の意見を聞く会があり、参加したところ、ボナペティさんが子どもの貧困について発表されていた。利用者が本当の困り感を訴えてくるまでは時間がかかり、交流を図りながら、時間をかけて信頼関係ができた時に気持ちを話されるようになったということだった。また、利用者の中には、世間の目、地域の目が怖く相談ができないという声があるとのことで、取りこぼしにつながると感じた。そのような話も次期くるめ支え合うプランに反映させてほしいと思っていた。ヒアリングされていたのでよかった。

また、お金がなく、子どもが親に必要なものを買ってほしいと言えない、子どもは我慢してしまうという話もあった。子どもでも安心して必要なものを受け取れる仕組み、環境づくりに反映させてほしい。

事務局：これまで行政計画を作る際に、子どもの意見が直接聞かれる機会が少なかったように思う。久留米市では、現在「こども基本計画」を策定するにあたって、子どもの意見を聞くワークショップなどもしている。くるめ支え合うプランにおいても、子どもも含め、困ったと言えない、意見を表明できない方の意見もなるべく拾っていけるよう考えながら進めていきたい。今後、多文化共生カルタを作成された久留米工業大学の学生や、大善寺校区の支え合い推進会議に委員として参画している筑邦西中学校の生徒にもヒアリングをしたいと考えている。

委員：聞いてほしい団体は、「じじっか」さん。また、「丸信」さんは男女平等推進の観点でも、男性の育児休業の取得率が高い企業として、県から表彰されている。また、コミュニケーションツールについては、ヒアリングや地域福祉マガジンなど、既存の取組みを基盤として実践できるのではないかと思う。

委員：人権の研修会にて、介護施設の施設長が、職員さんが子どもの病気で休ませないといけない時に、仕事を休まなくていいように、施設内保育所を設置され、職員の働きやすい環境づくりをされていた。また、事業所内に安全な場所を確保し、地域の方が誰でも避難してきていいという環境をつくっているという話があった。まさに地域共生の取組みをされている企業だと思った。ヒアリングの対象になり得ると思う。

会長：施設には発電機を持っていたり、食品のストックがあつたりする。災害時の地域貢献ができる事業所があることを一般市民が知らないこともある。それらを知らせていくことも大事。

事務局：「じじっか」さんは、市が開催している重層的支援体制整備事業の会議にメンバーとして入っていただいている。会議の中で、プランについて取り上げて、参加者からご意見を伺いたいと思っている。介護事業所さんについては、確認して検討したい。

(3) 委員アンケート集計結果について

【主な質疑応答・意見等】

委員：現プランの取組み方針への回答について、個人名が記載されているが、個人の活動ではなく、「グリーンコープ」として実施していることであるため、補足させていただきたい。

会長：グリーンコープでは、「きらりハウス」を設立されているということだが、そういった取組みについて共有いただくことは可能か。

委員：グリーンコープは、食べ物の他、福祉への関心がある。ある組合員が、子どもの居場所をつくりたい、という想いを持っていた。今は、子どもが集って遊ぶ関係性が薄くなっており、人間関係が形成されにくい状況がある。話を聞いた当初、実現は無理だと思ったが、想いを持つ人を中心に、スタッフが集まった。あとは資金が必要ということで、グリーンコープでは、任意で会員が月 100 円ずつ寄付して資金を集めており、その基金の一部を使うこととなった。また、たまたま物件が見つかり、購入しようということで、銀行融資を受け実施。

会長：一人の思いが仲間を作って実現した好事例ではないか。

委員：財源は、どんな活動をするにも大事なもの。福祉の世界は、ボランティア精神を求められがちだが、長期的に継続していくためにも資金は必要である。災害時も、最初は支援の人や物資が集まるが、すぐに散り散りになってしまう。現場では継続した支援ニーズがあり、財源の必要性をすごく実感している。また、「子どものアドボケイト」の視点で、子どもたちの意見表面は大事。この場に小学生を呼んで意見を聞く機会があってもいいと思う。

会長：ワークショップに子どもが入ると発言しやすいのではないか。

委員：ファミリーサポートセンターで、地域の中で、子どもたちを育てていくお手伝いをしている。くるめ支え合うプランについて、私たちは会議にも参加しているため知っているが、普段参加していない人は知らない。何かに参加してみると、愛着が湧き知ることができる。どのプランも内容は良いが、全部分厚くて、知らない人が多い。一部でもいいから知ってもらいたい。「こうやって頑張ろう」ということが、障害

の有無、子どもや大人に関わらず、皆にわかりやすいプランにしているかといけない。「プランができてよかった」ではなく、本当に困ったときに「よかった」となるものに。本当に困窮している人は、言葉ではなく、明日のご飯がないことが大変という現状がある。毎日の暮らしに焦点をあてていくこと、言葉だけではなく、取組みの一步につながる事が大事。

会 長：より親しいプランに、行動に移せるものに、小さなことに取り組んでいけるように、ということだと思う。

委 員：障害分野で子どもに携わることがあり、子ども分科会の中で、インフォーマルや行政と一緒につながりづくりを進めている。様々な場面で、課題が複合的になり、縦割りの行政を越えなければならなくなっている。現場では顔の見える関係ができてきた。これから、市全体でどこにお金をつけていくのが問題。学校に行かない選択をしている子どもたちがいる中で、子どもたちがいかに活躍していくか、学校に行くだけではないところで役割を担っていくなど、多様な視点で見ていく必要があると思うが、特に学校関係の皆さんとの連携や距離を縮める方法に悩んでいる。防災の取組みについても、法人の祭りの中で、炊き出し用の大鍋を購入して、団体の方と一緒に調理をしてみた。校区の祭りで、炊き出しを実際にやってみるなど、実践的なことを提案できたらいいと思う。障害がある方は、地域に迷惑をかけるから自治会に入っていないという方もいる。地域で一人暮らしをする障害者の方たちは、プランを知らない方も多くいる。事業所はたくさんあるが、くるめ支え合うプランの中身を知らない事業所も多い。一方で、BCPや感染対策などが法定研修で降りてくる。そうではなく、久留米市独自の方針として、例えばSDGsの中からどれか選んで取組むとか、防災リーダーを必ず1名入れるなど、久留米市としてやってほしい取組みを各事業所に提案するなどの取組みができたらいいなと思っている。

会 長：子どもの問題としても家族全体を支えていく必要がある。不登校の問題でも子ども一人の問題ではない。スクールソーシャルワーカーなど専門職がいれば解決できるというものでもない。また、校区ごとや事業所ごとにこれをやろうというような、アクションそのものを提案するというのもいいかもしれない。

委 員：更生保護の取組みの中に、久留米更生保護女性の会がある。その団体も高齢化が進んでいるが、やる気がある人も多い。「ほっとけない」をキャッチフレーズに取り組んでいる。一つの団体では難しいことも分

野を越えて、連携していくことでできることもあると思う。

委員：障害者の団体としても、地域共生社会の考えのもと、居場所づくりに取り組み、障害者のみのコミュニティはできてきている。ただ、これからは障害者だけで集まるのではなく、校区の中で交われないかと考えている。数年前は地域に出るとなると家族などの同行を求められたが、参加に配慮が必要な方は、「介助者が必要」などの記載があると、ボランティアとマッチングできる。また、防災について、避難所に行かない・行けないという方がいたため、車中泊訓練を行ったところ、やってみてわかることが多かった。それぞれの家庭で必要なものが違うことがわかった。お手軽に車中泊体験ができるような場所があちこちにあるといいなという声もあがっていた。

会長：発達障害の方では避難所になかなか行けないという人もいる。日常でやっておくと、いざというときに役立つということ。また、障害を持つ人ばかりが集まるということではなく、そうでない人との交流が共生ということだと思う。

委員：公募委員としてこの場に参加している。自分の校区で、支え合い推進会議でどのようなことが行われているかわからず、周知の方法や、オンライン会議をしてはどうか、住民代表を募集したらいいのではないかと、などを事務局に提案した。コミセンで1年半前頃からオンラインでスマホの無料相談会を行っている。こういった経験も踏まえ、委員として、校区のコーディネーターとして貢献できることはないか、推進役としてサポートできないかなど一住民として大変関心がある。このような取り組みが実行されれば、豊かな、安心安全なまちの実現につながると思う。支え合い推進会議などのこれまでの取り組みを土台の上に、住民の役に立てる仕組みができたらいいなと思う。

委員：生活困窮者の支援においては、病気や失職など様々な課題や要因を抱えている方が多い。その中で新たな課題として感じているのが、居住支援である。資金面や保証人の問題などクリアすべき課題が多い。住まいは居場所の手前の問題であり、人生、暮らしそのもの。他方で田舎には空き家がいっぱいあり、空き家の活用などとなげられないかと思う。また、ひきこもりの問題もある。長年ひきこもっている方へのアプローチがとても難しい。様々なことに拒否的な方も多い。家族がいる方は周りへのアプローチも検討できるが、身寄りがない方などは特に難しい。地域の中で、困ってそうな方や気になる方がいた時に、発信できる場所、相談できる体制を整えていくこと、地域の福祉

教育も大事。さらに、ゴミ屋敷の問題もある。本人はゴミと思っておらず、周りが困っていることが多い。この課題に誰がどう着手すればいいか困っている。本人の特性によることもある。そこを片づけないと進まないこともある。行政として、どこにどのように取り組めるか提案してほしい。また、生活保護にならない場合の問題。高齢で障害がある方で、仕事がない、お金がない、保証人がいないなどで家を借りられない。賃貸契約がしにくい。保証人の問題が課題だと思う。

委員：発信の必要性を感じる。久留米市内には色々な団体がすでにある。それをつなげるといいのかなと思う。大きなことはできなくても、隣の人や身近な人を助けることができればいいと思う。学校であれば、困っている友達がいればその子を支えようとか。自分の所属する人権協としては、最終目標は、人権協をなくすこと。人権の問題がなくなれば、私たちはいない。そこを目指していかないといけないと思う。そのためにも支え合いが大事になってくる。校区の中にもどんな団体があるのかを知らないことも多い。だから、発信が必要。校区で人権フェスタを開催し、子どもから大人まで参加できる機会をつくり、団体を知ってもらう取組みをしている。そこで、つながりができて支え合うことができると思う。

委員：久留米市の子育て支援においては、良い流れができてきていると感じる。虐待や生活困窮などのケースや、明日食べる物がないと相談されることはあるが、子ども食堂、ファミリーサポートセンターや『じじっか』、児童相談所や家庭子ども相談課など相談できる場所がたくさんあり、必要な所に繋がっていく。子育てに関してはよくつながっており、児相の保護や里親制度なども状況によって対応されている。一方、自分も子育てをする中で、PTAが昭和のシステムのままであると感じた。仕事をしながらPTA活動をするのは大変。昼間は仕事をし、帰宅後に地域活動や自治会活動があるのも大変。1回入ったら抜けられないという大変さもある。コミュニティセンターのあり方やシステムも見直しが必要だと思う。働き盛りは、校区のお祭りや運動会には行かない。楽しいことは個人でできているので、校区の運動会を防災の集いにしてみんなで防災を考えるなど、コミュニティで本当にやらないといけないことは何かを考えていった方がいい。良い所は残しつつ、変えなければいけないところは変える、令和のシステムに変えていく必要がある。また、子育てしやすいまちになっていると思うが、小学校、中学校から難しいことがたくさん出てくる。

委員：委員アンケートを通じて、取組みが足りてないところやできているところなど改めて振り返りができたのがよかったと思う。今後、ヒアリングする団体に、課題の把握だけでなく、今できていることなどが計画のどこにつながっているかを意識づけるといいのではないかな。
できていることが集まっていけば、これだけの団体が様々な活動をしているという周知にもつながる。

4 その他

事務局：次回の協議会は、1月頃を予定。

5 閉会